

第17回日本気象学会夏期特別セミナー（若手会夏の学校）の報告

第17回日本気象学会夏の学校実行委員会*

第17回日本気象学会夏期特別セミナー（若手会夏の学校）は、2005年7月29日（金）から31日（日）までの2泊3日の日程で、群馬県吾妻郡草津町の草津セミナーハウスにおいて、筑波大学が主幹となって開催されました。筑波大学が主幹となったのは今回で3回目となります。会場は、草津の温泉街まで程近く、議論の合間には名湯を楽しむことができる場所でした。

参加者は総勢141名で、近年の傾向と同様に修士課程の学生が中心の年齢層でした（学部生：14%、修士：60%、博士：17%、その他：8%）。

期間中に行われた講演を以下に記します。

■招待講演（90分/1人：2件）

松野太郎 先生

（地球環境フロンティア研究センター前センター長）

「地球温暖化と気候変化についての最近の日本の研究」

吉野正敏 先生

（筑波大学名誉教授・国連大学上級学術顧問）

「気候学の歴史」

■若手研究者講演（45分/1人：3件）

小木雅代（地球環境フロンティア研究センター）

「どうして私は北極振動を研究しているのだろうか？」

芳村 圭（東京大学生産技術研究所）

「水の安定同位体を用いた水循環過程解明」

茂木耕作（地球観測フロンティア研究システム）

「茂木耕作が梅雨期の東シナ海上で水蒸気前線を発見するまでの研究過程」

■一般講演（20分/1人：23件）

○メソスケールセッション

* 井上智亜(実行委員長)、石崎紀子、飯泉仁之直、松枝未遠、足立幸穂、川瀬宏明、岩井彩香、小杉菜穂子、
（他筑波大学気候・気象分野関係者）

吉野 純

（岐阜大学大学院工学研究科環境エネルギーシステム専攻）

「大気-海洋-波浪結合モデルを用いた台風0416号の予報実験」

清水慎吾（名古屋大学地球水循環センター）

「湿潤環境場におけるメソ対流系の維持メカニズム」

他6名

○モンスーンセッション

高橋 洋（名古屋大学地球水循環センター）

「東南アジアモンスーン域における降水量の気候学的な休止期について」

大和田春樹

（東京大学大学院新領域創成科学研究科環境学専攻）

「中国黄土高原における多雨期の降水地域特性」

他5名

○グローバルセッション

吉田 聡

（海洋開発研究機構地球シミュレータセンター）

「全球大気海洋結合シミュレーションにおける低気圧活動とオホーツク海の海水」

郡司博史（京都大学大学院理学研究科気象学研究室）

「回転球面上の円形領域における周極流の形成について」

他6名

■ポスターセッション（75分：17件）

セミナーハウスの体育館を利用して、17件の発表を行いました。

招待講演でご講演下さった松野先生は、モデリング研究の歴史を振り返りながら、最近の話題として、世界最大のスーパーコンピュータである地球シミュレータを用いた、地球温暖化予測の数値実験、および地球環境フロンティアで進行中の「全球雲解像大気モデル」

と「地球システム統合モデル」の開発状況についてお話し下さいました。温室効果ガスの増加による地球温暖化と気候変化についての予測は、国際的な取り決めに際しても重要な役割を果たしていると言えます。

吉野先生は、気象現象だけでは定義づけることができない気候についてご講演下さいました。気候は、自然科学として、気象学、大気物理・大気科学、および自然地理などの他に、動物・植物の生活との関わりからとらえなければならないためです。気候や季節の認識、および記録は、中国では紀元前21世紀までさかのぼります。ギリシャでも数百年遅れてその記録があるそうですが、これらは現在の水準からみても決して見劣りしません。古代文明の歴史的発展は、半球規模の気候変動と並行していることが多く、遣隋使・遣唐使の往来の記録にその事実を知ることができるなど、気候と人間活動の関わりについて考えさせられるお話しでした。

今回の夏の学校では議論の活発化を図るため、3つのセッションに分け、各セッションには気鋭の若手研究者をお招きし、座長をお願いしました。座長としてお招きした3名の方々にも講演を依頼しました。

グローバルセッションの座長をお願いした小木さんは、夏の北極振動の存在と今後の変動が地球規模での気候変動に及ぼす影響についてお話し下さいました。学部時代に始めた海水の研究から、現在の研究に至るまでの経緯を交えながらのお話しでしたので、今後の研究活動の参考になる学生が多かったかと思います。

モンスーンセッションの座長にお招きした芳村さんは、水の安定同位体を用いた研究についてご講演下さいました。降水粒子に含まれた水の安定同位体は、風向風速データを併用することによって、降水をもたらす水蒸気の起源を探ることに利用できるとのことでした。気象学や気候学という分野では、なかなか勉強することができない内容で、今後の降水課程の解明に向けて興味深い技術という印象を受けました。気象分野で水の同位体を扱っている研究者はまだ少ないため、興味ある方は積極的に挑戦して欲しいとのことでした。

メソスケールセッションの座長を務めて下さった茂木さんは、東シナ海上に見られた2本の収束線の解析を中心に話を進めて下さいました。その講演内容には、研究対象に対する修士課程の目線、博士課程の目線、研究者としての見方が異なることが含まれていました。これらの目線の違いから、議論へ参加するための切り口を示して下さいました。

一般講演は、座長の方々のお力添えもあり、各セッションで活発な議論が交わされていたようです。このため、1人当たりの発表時間、および質疑応答の時間が短かったというご意見を頂きました。夏の学校全体のスケジュールも含め、時間設定に関しては何度も議論を交わして決定しましたが、改めて会を運営する難しさを痛感しました。

ポスターセッションは、セミナーハウス内の体育館を使用しました。体育館の壁面にポスターを貼り付け、空間を広く利用できたため、ポスターを見やすい環境が提供できました。

セッション後は、参加者同士が親睦を深める場として懇親会を設けました。内容としては、研究室紹介、立食パーティー、および簡単なゲームを実施しました。毎年行われている研究室紹介は、21研究室から紹介がありました。恒例のイベントだけあって、各研究室の特徴がよく表れた力作揃いでした。立食パーティー後、筑波大生が片付けを始めると、その場に残っていた参加者の皆さんが自発的に片付けを手伝って下さいました。主幹側としては、申し訳ないと思うと同時に、同じ気象学会の若手であるという繋がりを強く感じました。

今回の夏の学校は、会場が交通の便が悪い草津温泉で開催したこともあり、開催日の前日から宿泊して頂けるように手配しました。前日宿泊の希望者は、予想以上に多く、全体の参加者の約半数に達しました。これは、今後の開催においても考慮されるとよいかもしれません。また、主幹側としては温泉街でゆっくり湯を楽しんで頂くことを考えました。そこで2日目のセッションは、16時過ぎまでとし、その後は夜の懇親会までの4時間を自由時間としました。この時、夕食は各自で自由に摂って頂くことによって、決められた夕食時間に束縛されることなく温泉を堪能して頂きました。

2006年度の日本気象学会夏期特別セミナーは、名古屋大学へ引き継ぐことになりました。来年度も活発な議論に加え、研究者同士の交流がより深まる会を催してくれることと思います。

最後になりましたが、夏の学校にご参加頂き、会の運営作業に労力を提供して下さいました皆様、このような企画の機会を与えて下さった日本気象学会関係者の皆様に心より御礼申し上げます。なお、夏の学校を開催するにあたり日本気象学会より援助をして頂きました。ここに厚く御礼申し上げます。